

---

# バカとバスケットと召喚獣

六甲水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとバスケット召喚獣

### 【Nコード】

N5239Y

### 【作者名】

六甲水

### 【あらすじ】

「明久。一緒に小学校に行かないか？」突然の雄二の一言。最初は「雄二。さすがにロリコンはマズイと思うよ」と思った明久であったが、雄二と翔子の小学校の頃の先生の頼みで、小学校の女子バスケ部のコーチを頼まれるが……

## 第1話 小学生たちとの出会い（前書き）

というわけで、活動報告で伝えたとおり、バカとバスケットを全部消し、新しく書くことにしました。ちなみにとある理由で姫路と美波の二人は全然出ません。

## 第1話 小学生たちとの出会い

その出会いは雄二の一言からであった。

「明久。少し頼みたいことがあるんだ。」

「ん？どうしたの雄二？」

休日のある日、明久の家に遊びに来ていた雄二が突然頼みごとをしだしてきた。明久はどうせ、またくだらないものだと思っていたが

.....

「明日の放課後、一緒に小学校に行かないか？」

「.....」

雄二の突然の発言を聞いて、明久は携帯に手を伸ばし.....

「あ、もしもし、霧島さん。雄二がロリコンに.....」

「待ってくれ、明久。誤解だ！」

「霧島さん。今すぐ来てくれるって」

明久がとてもいい笑顔で言うと、雄二は明久の胸ぐらを掴み、

「お前、頼むからそついうことは.....」

ピンポン

突然呼び鈴が鳴り出した瞬間、雄二の体は凍りついた。

「霧島さん、来たみたいだね」

「くそ、明久。この恨みは忘れないからな」

「……………雄二。小学生に恋するのは良くない。」

黒いオーラを出した霧島さんが雄二の顔を掴んで言った。それから数十分後僕の部屋は赤い血で染まるのであった。

雄二が蘇生し終わり、事情を聞くことにした僕。ちなみに霧島さんも一緒にいた。

「たくつ、明久のせいでひどい目にあっただぜ。」

「いやだって、いきなりあんなことを言われたら誰だってそう思うよ」

「……………吉井の言うとおり。」

「だからってな。まあいい。実はな俺と翔子の小学校の頃の担任から連絡あってな。いまその担任の知り合いがいる慧心っていう学校

でバスケのコーチを頼まれたんだ。」

「バスケの？でも、雄二って有段者とかじゃないよね。なのにどうしてそんなこと頼まれたの？」

僕がそう聞くと雄二は何故か渋い顔をしていた。すると雄二の隣に座っていた霧島さんが代わりに答えてくれた。

「……その私たちの担任の知り合い、美星っていうんだけど、その人の甥っ子さんにもコーチを頼んだんだけど、その人だけじゃちょっと手が足りないから……」

「ようするにだ。俺たちはその手伝いをするということだ。俺と翔子は小学校の時に世話になったから手伝うことにしたんだが、折角だから明久たちにも手伝ってもらおうかと思ってな。」

雄二が笑顔でそう言っていたけど、僕は雄二に耳打ちをした。

「それで、実際は？」

「翔子と一緒にいたら命がいくらあっても足りないからな。明久たちも巻き込んでしまえって思ったんだ。」

雄二、そこまで霧島さんと二人つきりになるのが嫌なんだ。でも、バスケか。少し面白そうだからコーチやってみようかな。

「僕はいいいよ。秀吉やムツツリー二にも頼もうよ。それに姫路さんや美波にも」

「秀吉とムツツリー二は既に頼んだ。二人も最初、俺のことを口リ

コン扱いしてたけどな。姫路と島田は放課後ちよつと残れないらしいから参加しないってよ。」

「そっか、とりあえずそのコーチしに行くのはいつくらいなの？」

「今週の月・水・金だ。学校終わったらその甥っ子と途中合流して、小学校に行く。」

「うん、分かったよ。」

こうして僕らはバスケのコーチをすることとなった。

そして次の日の放課後、雄二と霧島さんの担任の知り合いの甥っ子との待ち合わせ場所に來た僕ら、そこで待っていたのは……

「あつ、どうも、初めまして。長谷川昴です。って明久」

「甥っ子って昴だったの？」

僕の顔を見て驚く昴。僕も結構驚いていた。するとどういう関係か気になっていた女の子にしか見えない男の子、木下秀吉が聞いてきた。

「明久よ。そっちの甥っ子とお主はどういう関係なんじゃ？」

「うん、僕の家近所に住んでいる人だよ。」

「それにしても、ミホ姉からコーチの手伝いのする奴が来てくれるって聞いたけど、まさか明久だったとはな。」

「まあ、本来は雄二が頼まれたんだけどね。」

僕と昴の二人がそんなことを話していると、雄二がバス停の前で大声で呼んでいた。

「おい、早く行くぞ。バスに乗り遅れるぞ」

「遅刻したら洒落にならないね。早く行こう。昴」

「ああ、そうだな。」

久しぶりにあった昴だけど、何だか様子がおかしい感じがした。一体どうしたんだろう？この間会ったときは凄くバスケに燃えてたけど……

バスに乗ってしばらくし、目的地である慧心学園にたどり着いた僕ら、そして学園の門をくぐり、体育館の扉の前に来ていたけど……

「なあ、明久。」



「何？昂？」

後ろにいた昂が何かを聞いてきた。それは……

「あそのカメラ持つてる奴。大量に鼻血出してるけど、大丈夫なのか？」

昂が言っていた人物はムツツリー二だった。本名は土屋康太。通称『寡黙なる性職者』色々と盗………撮影や盗………録音機器の機械などにも詳しく、さらには工、保健体育に詳しくたりするけど、本人はそれを認めていなかったりする。ちなみに実際のエロいことに対して免疫がなく、鼻血を出していたりする。

「まあ、昂もそのうち、なれるよ。」

「あんまり慣れたくないけどな」

「ほら、無駄な話してないで、早く入ろうぜ」

雄二がそう言つて、とりあえず僕らは体育館の扉を開いた。その先には………

「…………お帰りなさいませ、ご主人様&お嬢様！……………」

「…………えっ？……………」

「ぎゃあああああああ！」

「…………目の毒……………」

扉を開けた先にはメイド服を来た五人の少女たちだった。そしてその瞬間、霧島さんが雄二の目を潰していた。

## 第1話 小学生たちとの出会い（後書き）

とりあえず、姫路さんと美波の二人は原作三巻の話で登場させるつもりです。次回はまあ、自己紹介話になりますね。

## 第2話 初日からドタバタ騒ぎ（前書き）

まあ、今回は自己紹介回になります。

## 第2話 初日からドタバタ騒ぎ

体育館に入った瞬間に、メイド服の少女が5人待っていた。ちなみに雄二は霧島さんに目を潰されて、凄く痛そうにしていた。

「あの、あの、大丈夫なんですか？隣の黒髪の人に目潰しされていたような……」

するとピンク髪の女の子が雄二の事を心配そうに聞いてきた。まあ、確かに僕らの場合は日常茶飯事だから慣れてるけど、この子達の場合にはちよつと刺激ありすぎだね。

「大丈夫だよ。雄二はああいう風にやられるの慣れてるから」

「え、あの、」

「とりあえず自己紹介でもしよつか。」

「はあ、」

まだ納得行っていないみたいだけど、このままこの子が雄二の心配してる……

「雄二、何、小学生に心配かけてるの？」

「待て、翔子。首を………」

死ぬ可能性が高くなるからね。

とりあえずお互いの自己紹介をすることになった僕ら、まずは女バ  
スメンバーから

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆です」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉……です」

「ひなた、袴田ひなた」

「せいの」

「よろしく願います!」ご主人様。お嬢様」

五人が礼儀正しく礼をしていた。でも、少し気になることがあった。

「あの、そのご主人様はちよつと……」

「うん、さすがにバスケのコーチなのにそれは……」

僕と昴の二人がそう言つと、真帆ちゃんがむくれて、

「ええー、いいと思ったんだけどな。」

「それじゃあ、お兄ちゃんて」

まあ、まだそっちの方がマシな気がするからいいか。とりあえず、僕らも自己紹介しなきゃ、

「えっと、それじゃあ、俺からだな。俺は長谷川昂。知ってると思うけど、ミホ姉……美星先生の甥っ子だよ。」

昂くんは普通に自己紹介してた。お次は僕だな。

「僕は吉井明久。よろしくね。」

至って普通の自己紹介をしたけど……

「ね、あの人バカっぽくない？」

「ダメよ、真帆。あんまりそんな事言っちゃ」

「おー、バカっぽいお兄ちゃん」

真帆ちゃんの一言で、何だか僕の心がすごく傷ついたよ。あれ？何だか涙が……気のせいだよな。

「まあ、明久よ。小学生にバカ呼ばわりされて泣くんじゃない。次はわしじゃな。わしは木下秀吉じゃ。」

「ねえ何である人、女性なのに男物の制服来てるの？」

「きつと男に生まれたくて男の制服を着ているんだよ」

「いや、ワシは……」

「ほら、自分のことをワシと言ってるしね」

「そこは関係ないと思うのじゃが……」

またまた真帆ちゃんの一言から始まった。でも、しょうがないよね。秀吉はどっからどう見ても男には見えないからね。」

「明久よ。お主、何かおかしな事を考えてないか？」

「気のせいだよ。秀吉。秀吉は小学生でも女の子にしか見えないって思われてもしようがないって、思ってるんだよ。」

「やっぱり、おかしな事を考えていたではないか。」

次はムッツリーニの番だけど……

「なあ、明久。さっきからあそこで写真撮ってるけど、犯罪にならないのか？」

昴はそう言つと、僕は昴が見つめる方を見るとムッツリーニは智花ちゃんたちのメイド服を熱心に撮影してる。

「……………これが必要が……………」

「ムッツリーニ。それ、一応言っておくけど、犯罪だからね。」



僕が写真を撮っているムツツリー二言つと、ムツツリー二は思いつきり首を横に振る。

「おもいつきり否定してるが、みんなにバレバレだからな」

「……………これ口止め料」

ムツツリー二はそう言つて、昴くん一枚の写真を渡した。その写真に映っていたのは……………着替え中の女子高生の写真。

「これ、盗撮だろ！！というか、口止め料つて」

「あの、何の写真なんですか？」

智花ちゃんが昴が持っていた写真を見ようとしたけど、昴くんが一瞬の内にその写真をビリビリに破り、ゴミ箱に捨てた。まあ、あんなの見たら卒倒しちゃうよね。

「とりあえず、見た通りだけど、さっき写真取つてたのは土屋康太つていうんだ。」

「……………よろしく。」

あとは残っているのは雄二と霧島さんだ。

「次は俺だな。坂本雄二だ。俺たちは長谷川のコーチの手伝いとして来てるからよろしくな。それで、こっちは……………」

「……………霧島翔子。雄二とは婚約者」

「『『『えええー』』』』』』」

「高校生って凄いですね。」

「お、大人だあー」

「それに婚約者って、もしかしてけ、結婚間近ってことですか？」

「す、すごいです。」

智花ちゃん、真帆ちゃん、紗季ちゃん、愛莉ちゃんの四人は雄二と霧島さんの関係について凄く盛り上がっていた。その問題の二人はと言つと……

「翔子！小学生に嘘を吹きこむな」

「……嘘じゃない。ちゃんと婚約届用意してあるから……」

「あれは、お前が勝手に……」

雄二と霧島さんのやり取りをじっと見ている僕と昴と秀吉（ムッツリーニは写真撮影）。するとひなたちゃんが僕らにあることを聞いてきた。

「おー？お兄ちゃん。馬鹿なお兄ちゃん。おねにいちゃん。こんなにやくしゃって何？」

「こんなにやくしゃじゃなくって、婚約者だよ。ひなたちゃん。とりあえず簡単に言つとね。近い内に結婚する二人のことだよ。」

「おー、そうなの？じゃあ、おつきいお兄ちゃんと綺麗なおねえちゃんは結婚する？」

「あはは、そんなことしたら、多分怖い集団に雄二がボコられたりするね。」

僕がひなたちゃんにそんなことを言っているなか、昴と秀吉は……

「なんか、明久の学校って怖いところなのか？怖い集団にボコられるって……」

「それより、袴田のおねにいちゃん。絶対言いづらいじゃろ」

そんなこんなで、お互いの自己紹介を終える僕らだった。

とりあえず昴は智花ちゃんたちにメイド服から着替えるようにっていい、智花ちゃん達が体操服に着替えて、僕らの前に来た。

「…………おまたせしました…………」

「それじゃあ、みんな始めようか」

「……………よろしくお願いしまーす……………」

昴の号令でバスケの練習を始めるのであった。基本的には昴が指導とかして、僕らは智花ちゃんたちと一緒に参加したり、個人レッスンをしたりしていた。ちなみに個人レッスンの相手は

智花ちゃん＆秀吉ペア

真帆ちゃん＆僕ペア

紗季ちゃん＆霧島さんペア

ひなたちゃん＆ムッツリーニペア

愛莉ちゃん＆雄二ペア

でやることとなった。それにしても、ムッツリーニ、ひなたちゃんに教えてるのはいいけど何だかたまに隠し撮りしてるのは……………

そんなことを心のなかで突っ込みを入れていると真帆ちゃんがあることを聞いてきた。

「ねえねえ、あっきー？」

「あっきー？ああ、あだ名？何？真帆ちゃん」

「さっき、すばるんに言われたんだけど、おふえんすって何？」

「オフェンスっていうのは攻撃のことだよ。ディフェンスは守り」

「おお、バカそうに見えて意外と知ってるんだね。あっきーは」

真帆ちゃん、結構一言が多いよ。それに……

「馬鹿な。明久がオフェンスの事を知っているだと」

雄二も僕の事をどれだけ馬鹿にしてるのさ。それぐらい知ってるからね。

とりあえず練習を続けていると、雄二が愛莉ちゃんにあることを言った。

「そういえば、香椎は背が高いからディフェンスの方が向いてるんじゃないのか？」

「」「」「あ！」「」「」

「えぐ…ふえええええん！」

雄二の一言で愛莉ちゃんが突然泣き出した。僕らは愛莉ちゃんを泣かした雄二を思いつきり避難した。

「雄二、何言ったか知らないけど、土下座しなきゃ」

「小学生を泣かせるのはいかんと思うぞ」

「……………いじめかっこわるい」

「雄二、小学生泣かしちゃ、駄目」

「待て、翔子。俺も原因が……って、そっちに腕はまがら……ぎやあああああああああ！」

霧島さんに折檻を受けている雄二。昂も心配そつに愛莉ちゃんを見ていると、智花ちゃんが……

「あの、長谷川さん。吉井さん。愛莉、身長がコンプレックスなんです。背のこといわれるとあんな感じに……」

「どうすればいいんだ？」

「とりあえず誕生日のことを言えば……」

「よし、昂。早く愛莉ちゃんを落ち着かせよう……ってムツツリー二？」

気がつくともツツリー二が愛莉ちゃんに何か言っていた。すると愛莉ちゃんは直ぐに泣き止んだ。

「ムツツリー二？愛莉ちゃんに何言ったのかな？」

「小学生のうちは背が伸びやすいからしょうがない。だが、直ぐに縮む。って言ってましたよ。」

紗季ちゃんがムツツリー二が愛莉ちゃんに言った言葉を教えてくれた。ムツツリー二、意外とやるかも……

その後、愛莉ちゃんが僕らにいきなり泣いたことを謝ってきたけど、僕らは気にしていないよって答えた。それに、原因の雄二は責任持つて折檻受けてるし、

とりあえず雄二が復活し終わり、練習を続けているなか、僕はフツと智花ちゃんのシュートを見た。智花ちゃんのシュートは見事にゴールに入っただけ、それだけじゃない。シュートスタイルがとても綺麗で……見とれてしまった。そのことを昂に言う……

「智花は確か経験者って聞いたけど、あれは凄いな」

「うん、凄く綺麗だったよね。」

僕らはそのことで盛り上がるのであった。

その後、練習も終わり、昴の従兄妹の美星先生の車で昴と一緒に送ってもらったのであった。

「いやあ、悪いね。まさかこんなに多くなるとは思ってたけど、」

「たくつ、ミホ姉。確認しないから」

「僕も雄二に頼まれたときはあんまり乗り気じゃなかったけど、ちよつとコーチやる気が出てきましたよ。」

「おつ、そっちのバカそうな奴は真面目だな。なあ、昴。」

バカそうってひどい言われようなんだけど……

「でも、三日の約束だろ。」

「雄二も三日だけって言うてたけど、僕は続けてもいいと思う。」

僕がそういうと昴は何故か浮かない顔をしていた。一体どうしたんだろう？とりあえず雄二に三日だけじゃなくって、これからも続けようって相談しようと思っただった。



## 第2話 初日からドタバタ騒ぎ（後書き）

やっぱり雄二がひどい目に……まあ、姫路さんと美波がいなくて明久は結構ひどい目にあわないからですけどね。

### 第3話 脅迫文と三日目（前書き）

何だか昴の影が薄くなって来ましたけど、頑張っ  
て濃くします。

### 第3話 脅迫文と三日目

コーチ二日目、僕は雄二にもっとコーチを続けようと言ったけど、雄二は「めんどくさい」と言って、説得に失敗した。とりあえず、僕らは二日目のコーチを続けることにした。ちなみに秀吉は演劇部の用事で来られなく、ムツツリー二は新型のカメラを買いに行つて来られない。なので、今回は僕、雄二、霧島さん、昂の四人でやることにした。

「じゃあ、シュートとパスの練習に分けようか」

昂の指示で真帆と紗季はシュート練習、智花とひなたと愛莉はパス練習に分かれた。パス練習では雄二と霧島さんがコーチ、シュート練習は僕と昂がコーチをすることにした。

昂が智香ちゃん達の練習を見てこんな事を言っていた。

「智花は経験があるから上手いな。紗季と真帆は初めてにしては上手くなっていつてる。愛莉とひなたは時間がかかりそうだな。」

「でも、みんな頑張ってるね。」

「ああ、そうだな。」

昂はそう言ってるけど、たまに浮かない顔をしている。一体どうしたんだろう？

練習を一旦終わらせ、みんなで休憩を取っていた。雄二と昴と智花ちゃんは練習メニューを見ていた。僕と霧島さんは愛莉ちゃん、ひなたちゃん、紗季ちゃんの三人と色々と話していた。

「そういえば、吉井さん達って、あの文月学園にいらんですよね。」

「うん、そうだよ。」

「文月学園って、あの召喚システムの？ちょっと怖いなあ……………」

「…………大丈夫。結構可愛い。」

霧島さんが笑顔でそういうと、ひなたちゃんが…………

「おー、ひなも召喚してみたい。」

「あはは、機会があったらね。」

他愛のないことを話していると、突然真帆ちゃんが…………

「困るよ!」

大声を出して雄二たちになにか言っていた。僕と霧島さんは雄二がまた変なことを言ったのか思ったけど、

「どうして!?ゲームなら一時間でレベル3くらいいくのに……………」

「あんな、それはゲームの話だ。三沢たちの実力なら一ヶ月くらい

頑張れば直ぐに強くなる。だから……………」

「一か月じゃ待てないよ!!」

「……………無理なもんは無理だ。」

雄二がそう真帆ちゃんに言った。一見冷たく言ってる気がするけど、雄二の言うのは正しい。けれど、真帆ちゃんのあの必死な感じ……………どうしたんだろう？

「もういい!!」

「あ…!」

真帆ちゃんはそのまま体育館を出ていつてしまった。僕は真帆ちゃんを追いかけてようとしたりけど、紗季ちゃんに止められた。

「ごめんなさい。吉井さん。ここは私に任せてください。長谷川さんも坂本さんもご迷惑をかけてすみません。気にしないでください。」

「

そう言っつて紗季ちゃんは真帆ちゃんを追いかけていった。僕と霧島さんはどうすればいいのか分からなかったのだった。

コーチを終えて、みんなで体育館を出ようとした時のこと、

「真帆ちゃん。一体どうしたんだろう？」

「……雄二と長谷川がきついこと言っただけから傷ついた？」

霧島さんがそう言っていると雄二が機嫌悪そうに言った。

「さあな、この間の香椎の場合は知らなかったからしょうがないとしてだ。今回の件で女バスメンバー何か隠してるな。」

「隠してる？」

「ああ、その態度を見てそう思ったただけだな。とりあえず後一日だけだ。俺も今日のことは忘れようと思う。」

雄二がそう言って、靴を取った。隠してるって一体何を……ふつと昴の方を見ると昴は紙切れを見て驚いていた。

「どうしたの？昴？」

「あつ、いや、なんでもない。俺は先に帰るから……」

昂はそう言ってそそくさと走っていった。

「どうしたんだろう?。」

僕はそう呟きながら靴を取ろうとすると靴の中に一枚の紙切れが入っていた。その紙に書いてあったのは……

『今すぐ女子バスのコーチをやめろ。さもないとひどい目にあうぞ』

僕はそれを見て、雄二に見せた。雄二は……

「これは子供の字だな。どうにもきな臭くなってきた。」

雄二の表情は険しかった。でも、いったいこんなこと誰が……

それから三日目の日のこと、今回は秀吉たちも参加できるので、六人で一緒に体育館に向かっていた。その途中、雄二が………

「長谷川。お前もあの警告文のこと知ってるな。」

突然雄二がそんなことを言い出すと、事情を知らない秀吉とムッツリーニは……

「警告文？どういうことじゃ？」

「……………どんな文だ？」

「これだよ。」

そう言つて、僕が二人に例の紙切れを見せると二人も険しい顔をしていた。

「これは……………冗談にしては笑えんのう」

「コクッ」

「俺のところにもその警告文あつたけど、」

僕らはその警告文について話していると……

「雄二、あれ、」

僕らは霧島さんが指を刺した方を見るとそこには小学生5人の男子が並んでいた。



「おい、女バスのコーチたちだろ。話がある」

僕らはそのまま体育館の裏まで連れてこられ、その5人からの話によると男子バスケット部のメンバーで、昨日の紙切れを書いたのは自分たちだといった。

「君たちがあの紙切れを…」

「今すぐ女子バスケット部のコーチをやめろ！さもなければ…」

「コーチなら今日で終わりだ。」

昴がそう言つと、何故か小学生たちは驚いていた。とりあえず、僕は事情を説明した。

「元々僕らは三日の約束だから、今日がその最終日。」

「そ、そうか…」

「なんだよ竹中、脅かすなよ…」

「だって真帆がすごいコーチがいるって自信満々だったから……じゃあ、試合には……………」

「試合？」

「どうやら、こいつらのほうが色々と事情を話してくれそうだな。」

雄二が笑みを浮かべながらそう言っていた。確かにあんまり事情が

わかっていない僕らには知るチャンスが来たという事かな？

男バスから試合のことなど色々と事情を聞くと……

「今度の日曜日に俺たちと女子バスケ部で試合をするんだよ。あんなたちはそのためのコーチだろ？」

「なるほどな。三沢のあの態度、納得がいった。お前らと女バスは何で試合するんだ？」

「体育館の練習場所をかけてだよ」

「体育館をかけて？何でまた、」

僕がそう言つとリーダー格の子が答えた。

「俺たちは昨年の地区大会で優勝をしたんだ。でも、実力はまだまだだから練習したいと思ってる！だけど、女バスが練習で使ってるから駄目だつて……それで顧問に相談したら今度は美星と喧嘩して、いつの間にか試合で決めようって話になったんだ」

「待つてよ。一緒に練習すればいいじゃんか。なんでそんなことを……」

「はあ？あんだ、バカそうな顔してるけど、本当に馬鹿だな。」

また小学生に馬鹿にされた。けれど、落ち込む前に彼が言った言葉を聞いてそんな気なくした。それは……

「あんなヘタクソな奴らと練習なんてできるか！アイツらのバスケットなんて……ただの遊びじゃねえか！」

「ヘタクソ？遊び？ふざけんなよ！！智花ちゃんたちは確かに今はそんなに上手くはないけれど、一生懸命練習してるんだぞ。そんな子たちの頑張りを遊びだつていうのかよ。ふざけんな！！いくら小学生とはいえ、言つていい事と悪いことの区別も付かないのかよ！」

「落ち着け。明久。こんな子供に切れてもしょうがないだろ。」

「そうじゃ、たかが子供の言うことじゃ、気にすることはない。」

雄二と秀吉の二人が止めに入っただけ………あんなことを言うのはひどいと思う。

「悪いな。竹中とやら、さっきも言つたように俺らは三日だけの約束だ。俺らの知らずの内に美星のやつに利用されただけのいわゆる被害者だ。今日で美星に頼まれたコーチの日程は終わりだからな。安心しろ」

「ちっ、分かったよ。解放してやる」

竹中がそう言つて、どこかへ行つたけど、でも、僕は智花ちゃんたちの事を馬鹿にされたのは凄くむかついていた。

「雄二、いいの？このままじゃ智花ちゃん達が………」

「まあ、元々約束だし、長谷川もそう思ってるからな。」

雄二がそう言つて昴の方を見た。昴は……

「明久、俺も女バスのみんなにそこまですることは出きない……………」

「……………分かったよ。雄二はともかく昴までそこまで腑抜けなやつだつて思わなかった。もう勝手にしたら、僕は帰る。」

「ま、待つんじゃ、明久」

「……………明久」

明久はそのまま歩いてどこか行つてしまい、秀吉とムツツリー二は明久を追う。残された俺と翔子と長谷川は……………

「たくつ、あの馬鹿は……………」

「雄二。見捨てていいの？あのままじゃあの子達……………」

「悪いが、頼まれたのは三日だけだからな。それに……………」

俺は長谷川を睨むと……………こう呟いた。

「長谷川、お前、どこかでもうバスケは諦めてないか？」

「えっ、」

「美星から聞いたけど、お前が通ってる高校のバスケット部。活動停止らしいな。その所為かお前はバスケット自体嫌いになりそうになってる。そうだろ」

「……………ああ、だけど……………」

「だけど、やっぱり気になるんだろう。あの子達が……………」

「そ、そうだな。」

長谷川は暗い顔をしてつぶやくと、俺はため息を付いて体育館から背を向けた。

「悪い、俺は今日は帰らせてもらっ。今日のコーチはお前に任せたくぞ、翔子」

「……………雄二。」

俺と翔子はそのまま湊たちと会わずに帰るのであった。残された長谷川は……………

「……………」

ただ黙ったままだった。

「雄二、いいの？私は吉井の言うとおり、もう少し続けてあげたい。」

「たくつ、約束は約束だからな。守らないといけないからな。ただど………残りの一週間は勝手にやらせてもらっけどな」

「えっ？」

「男バスの連中は二つミスを犯した。一つは俺たちは馬鹿だからあんな奴らの脅しに屈せずに……勝手に湊たちのコーチを続ける。2つ目は……男バスは明久を怒らせた。明久はとんでもない馬鹿だが、馬鹿をなめたら痛い目に合うことを教えてやらないとな。」

「そう、やっぱり雄二は凄いね。」

「ふん、」

### 第3話 脅迫文と三日目（後書き）

とりあえず、次回は玲姉さんの登場です。明久、頑張れ。

## 第4話 姉とコンロ（前書き）

お待たせしました。今回は玲さんの登場です。



## 第4話 姉とコンロ

休日、明久は自分の部屋である本を読んでいた。

「うーん、やっぱり素人じゃ上手く教えるのは難しい……………」

「アキくん？ちよつといいかしら？」

明久の部屋に入ってきたのは、明久の姉、吉井玲だった。明久と違ってかなり頭も良く、今は明久の一人暮らしの監視に来ているのだが、明久のことが物凄く好きすぎている。

「何？姉さん？」

「ちよつと…………あら？何読んでいるのですか？」

玲は明久が読んでいた本を奪った。明久が読んでいた本は…………『バスケット入門書』と書かれた本だった。

「あら？アキくん。バスケットでも始めるの？」

「あ、いや、ちよつと…………姉さん。ちよつと相談に載ってもらいたいんだけど……………」

「何かしら？」

「実は……………」

明久は今、自分が智花たちのバスケットのコーチをしている事や男子バ

スケ部に言われたことを話すと……

「アキくんがロリコンに……」

「違うからね！話し聞いてた！？」

「まあ、冗談はさておき、アキくんはどうしたいんですか？」

「そりゃ、続けたいって思ってるよ。だって、あんなに頑張ってる  
智花ちゃんたちのことをバカにするなんて……あんまりだよ。」

「そうですか。じゃあ、続けたいと思いますよ。アキくんがそ  
う思っているんだったら……」

「うん、分かったよ。ところで姉さん。僕に何か用なの？」

「ああそうでした。さっき料理をしようとしたら、コンロが壊れて  
火がつかなくなったので、今日の夕御飯は抜きで……」

「いや、それ、ダメだよ。というか修理に出すとか考えてよ。」

明久がちよつと抜けた玲に突っ込みを入れる中、ある事を思い出し  
た。

「そうだ。姉さん。昴の家でコンロ借りようよ。」

「ああ、さっき言っていたコーチをしてる。いいですよ。」

明久と玲の二人が食材を持って長谷川家に訪れると昴の母親七夕が出てきた。

「あら、吉井くんじゃない。どうしたの？」

「ごめんなさい。ちょっと事情があって……コンロ壊れちゃって……キッチン借りていいですか？」

「あら、でしたら今晚は一緒にお食事どうかしら？丁度今、昴くんがお客さん連れてくるので、」

「お客さん？」

明久がそう言うのと、直ぐに昴が帰ってきた。昴の隣には智花がいた。

「あれ？明久。」

「おじゃましてるよ。智花ちゃんも久しぶり」

「お久しぶりです。吉井さん。」

「じゃあ、七夕さん。僕も手伝います」

「あらありがとう。」

明久が料理の手伝いをしている中、明久は昴の顔つきが変わったことに気がついた。

（何かあったのかな？）

明久がそう思っていると、昴がキッチンの方へ来て、こう言った。

「明久。俺、さっき決めたんだ。俺、男バスとの試合までコーチ続けるよ。だから……明久にも手伝いを……」

「そっか、僕も実は一人でみんなのコーチをしようって思ってたんだけど、頑張って勝とう男バスに」

「おう」

## 第4話 姉とコンロ（後書き）

何だかすっ飛ばしすぎてすみません。次回はコーチ再開となります

## 第5話 再開と二つ名 前編（前書き）

久しぶりの更新ですみません。今回は前後編に分かれます

## 第5話 再開と二つ名 前編

コーチを再開する前日の夜、雄二は僕の家に来ていた。

「たくつ、いきなり呼び出しやがって……」

「ごめん。雄二！でも、今しかないと思うんだ！頼む！一緒にバスケのコーチを手伝ってもらえない？」

僕は土下座をしながら雄二に頼み込んだ。すると雄二はため息を付き……

「ふう、たくつ、その事が。いいか、明久、俺たちが美星に頼まれたのは三日だけだ。頼みの追加なんて聞いてないし……」

「お願いだよ雄二！もう秀吉とムツリーニは頼んだし、昂くんもやる気出してるんだよ！あとは雄二がコーチに参加してくれば……」

僕は必死に頼み込んだ。けれど雄二は頭を掻きながら答えた。

「……明久。お前馬鹿だな。」

「それは分かってる」

「そうか、だったら言うておく！俺はお前みたいな馬鹿に土下座されて頼まれなきゃ動かないやつだと思っつか？」

「えっ？」

雄二の言葉を聞いて、僕は思わず顔を上げると雄二は……

「俺達は馬鹿だからな頼まれていない仕事は勝手にやらせてもらうぜ！それに……あの糞ガキどもに湊たちの凄さを分らせてやるさ……！」

「……雄二。ありがとう。そしてごめん」

「おい、なんで謝るんだ？」

「実は雄二のことだから絶対に僕の頼みなんて断るだろうと思って……霧島さんに嘘を教えて脅してもらおうかと……」

雄二は僕の言葉を聞いて冷や汗をかいていた。そして……

「なんて嘘をついた！」

「『雄二は男バスの人たちと約束した』って」

「なんてだ」

「『もしも智花ちゃんたちが負けた場合……雄二は霧島さんを振って、竹中さんと付き合う』って……」 「歯ア食いしばれ！」

雄二は僕がついた嘘を聞いた瞬間、胸ぐらを掴んで殴ろうとしていた。僕も殴られないように必死に抵抗をしていると……

『アキく〜ん？翔子さんが来てるわよ〜』



「あつ、来たみたいだね」

「明久……あとで覚えてろよ！そして絶対に男バスを徹底的に負かせて、泣かしてやる！」

雄二はそう言いながら、訪ねてきた霧島さんに引きずられながら帰っていくのであった。雄二……死なないように……

そして翌日の放課後、僕らは昴くんと合流をして慧心学園に来てい

た。

「長谷川も元気になってよかったのう」

「ああ、ありがとうな。木下。」

昴くんと秀吉は握手を交わし、ムツツリー二はと言うと……

「…………元気になると思って」

ムツツリー二はそう言って、昴くんに渡したのは……

「土屋。これはまずいから」

「大丈夫！きつと必要になる」

ムツツリー二が昴くんに何の写真を渡したか気になり、横から覗き込むとそれは……

『香椎愛莉のブラ透け』

「ムツツリー二！あとでそれ売って！（それは可哀想だよ！）」

「明久！何か言っていることと思っていること逆になってるぞ！」

昴くんがツツコミを入れてきた。ふう、これはうっかりしてたぜ。

「ところで明久、坂本が……」

昴くんがそう言いながら雄二の方を指さすと、雄二は体中に痣がで

きていた。

「ああ、気にしないで、あれはただの夫婦喧嘩の後だから」

「夫婦喧嘩って、霧島さんとか？」

昂くんがそう言うと、霧島さんが僕らに近づき……

「……絶対に勝とう！」

「あ、はい」

どうやら僕がついた嘘が霧島さんを燃え上がらせていたみたいだった。これならなんとかなるよね。

そして僕らは体育館に着き、中に入っていくと……

「…………お帰りなさいませ、お嬢様！」…………

メイド服の智花ちゃんたちが出迎えてくれた。ムツツリー二はいつもみたいにカメラで智花ちゃんたちを撮りまくっていた。あとで売ってもらおうかな？

その後、みんなが体操服に着替えさせ、僕らは頼まれていたコーチの日に来れなかった事を謝った。すると智花ちゃんたちは笑顔でゆるしてくれた。そして僕らは男バスに勝つための練習を始めるのであった。

まずは智花ちゃん、愛莉ちゃん、ひなたちゃんの三人にランニングをしてもらい、その手伝いとして、秀吉、霧島さんが行き、残った真帆ちゃん、紗季ちゃんにはシュートの練習をすることになった。見るのは僕、雄二、昴くん、ムッツリー二の四人となった。

「じゃあ、この距離からシュートを試してみる！今日から試合までその位置でシュートをするように覚えておけばいいな」

雄二は紗季ちゃんにシュートについての個人レッスンを行なっていた。紗季ちゃんはどうもなんだか不満そうに……

「少し遠くないですか？」

「大丈夫だ。シュートを打ってみろ」

「はい」

紗季ちゃんは言うとおりにシュートを打った。だけどそのシュートは外れてしまった。

「あ……………」

「おしいが、少しずつ練習していけば入るようになるからな。」

「はい！」

雄二の指示を聞いて、紗季ちゃんは返事をする。それにしても雄二、あんなに近い距離で指示出してたら……………

『雄二……………小学生に欲情を……………』

ほら、声が聞こえた。雄二……………頑張れ！

「ねえ、あつきー？ちゃんと見ててよ」

すると真帆ちゃんが今度シュートを打つ番となった。

「ごめんごめん。いいよ、打つても」

「よし、入れ！」

真帆ちゃんはゴール目掛けてシュートを打つ。だが、そのシュートも外れてしまった。真帆ちゃんは少し落ち込んでいたけど、僕は直ぐにはげました

「大丈夫だよ。フォームはいいし、あとは練習していけばいいから」  
僕はそう真帆ちゃんを励ましているなか、ふっとムツツリーニが何かをやっているのに気がついた

「ムツツリーニ？何やってるの？」

「……明久。男バスがこの間の休日にやった紅白試合の映像を回収していた。」

「へえ、ムツツリーニ。やるね。まさか智花ちゃんたちの練習風景を盗撮していた隠しカメラが役に立つなんてね」

「ブンブン！！」

ムツツリーニは必死に否定していたけど、明らかに偶然撮れてしまったものだよね。それ……

とりあえず練習に戻ろうとすると秀吉が慌てた様子で体育館に入ってきた。

「大変じゃ、袴田が！」

ひなたちゃんに何かあったのか？僕らはそう思い、外へと出るのだった。

## 第5話 再開と二つ名 前編（後書き）

次回は二つ名について触れます。とりあえず次の更新は明日、ゆる恋の本編と番外編と同じ時間に上げる予定です

## 第6話 再開と二つ名 後編（前書き）

今回は後編となります。話的には二つ名について触れるつもりです。



## 第6話 再開と二つ名 後編

秀吉の知らせを聞いて、僕たちは体育館の外に向かうところにはラ  
ンニングをしていたひなたちゃんが倒れていた。

「ひなたちゃん大丈夫？」

僕と昴くんが倒れたひなたちゃんに尋ねるとひなたちゃんは……

「……大丈夫……だよ……お兄ちゃん……」

「くはっ」

何故かひなたちゃんから物凄く可愛らしいオーラを感じて、昴くん  
がひなたちゃんを背負い、一緒に保健室へダッシュするのであった。

「一体何があつたのじゃ？ 明久と長谷川は……」

「さあな。とりあえず俺達も保健室に行くか。湊、案内してくれ」

「あつ、はい」

雄二たちも保健室へと向かうのであった。

保健室へ向かおうとする僕はというと……

「ひなたちゃん！すぐに保健室に連れてくから！」

「にゃーにゃーにゃー、大丈夫。お兄ちゃんたちのおかげで少し元気になりました。」

「そっか」

僕は下駄箱で靴を脱ごうとすると、ひなたちゃんを背負っている昴くんは靴を脱ごうとしなかった。

「どうしたの？昴くん？」

「あつ、いや、靴をキツく縛って……脱げないんだ。悪いけど明久、脱がしてくれないか？」

「あ、うん、分かったよ」

僕は昂くんの靴紐を解こうとしていると……

「ひなた！？お前何やってるんだよ！」

するとこの間会った竹中がいた。

「おー、竹中」

「てか、何でお前らがいるんだよ！この間コーチが終わったって言うてたろ！」

「悪いけど、わけあって続けることにしたんだ」

「僕らも勝手にやってるだけだし、」

「くっ、というかひなたを降ろせよ！」

「これもちよつとわけあって降ろせないんだ！」

「もしかして、怪我でもしたのか？」

何故か竹中くんはひなたちゃんを心配そうにしてた。どうしてだろ？竹中くんって女バスの子嫌いみたいな感じしたんだけど……

「おー、してない」

「そっか、よかった……」

うーん、やっぱりおかしい。何かひなたちゃんだけ甘い気が……

「ほう、男バスの糞ガキがいるじゃねえか」

すると後ろから声が聞こえ、振り返るとそこには雄二達<sup>た</sup>がいた。すると竹中くんは……

「誰が糞ガキだ！いいか、あんたらがコーチやった所で今度の試合で俺たちは負けるつもりはないからな！」

竹中くんはそう言い残して去っていった。一体どうしたんだろう？

「ふむ、あの竹中と言うやつ……もしかして……」

すると秀吉が何かに気がついた。さらに雄二も……

「ああ、どうやらあの反応を見るかぎり……これは試合に使えるぞうだな」

あれ？何か雄二が何か悪だくみしてる。もしかして……

「雄二！いくらシヨタに目覚めたからって竹中くんを襲う気？」

「明久！お前、何を馬鹿なことを……………」雄二、ゆつくり話を聞かせてもらう」って翔子、あれは明久の冗談で……………や、やめ、ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ

霧島さんは雄二処刑を行うのであった。そんな中僕らが出来ることはひなたちゃんと智花ちゃんにトラウマが出きないように見せないことだった。

ようやく保健室にたどりついた、僕、昂くん、ひなたちゃん、智花ちゃん、秀吉、霧島さん、雄二（臨死体験中）。中に入るとそこには容姿はレイヤードのショートヘアと縁無し眼鏡をかけた物腰の柔らかい理知的な大人の女性が椅子に座っていた。

「あら？どなたかしら」

「あ、俺たちは今、バスケのコーチを……」

「ああ、聞いてるわよ。確か美星ちゃんの甥っ子の昂くんにその手伝いをしに文月学園から来た子達ね！」

「おー冬子」

「くすっ、あなたたちも無垢なる魔性の餌食みたいね」

イノセント・チャーム

「え？なんすかそれ…」

「無垢なる魔性…。その子のふたつ名よ。私…生徒にあだ名をつけるのが好きなの…」

保健の先生は僕らに女バスマンバーの二つ名を教えてくれた。愛莉ちゃんプリズマティック・バドは七色彩蕾、真帆ちゃんファイヤー・ワークスは打ち上げ花火、紗季ちゃんアイス・エイジは氷の絶対女王政。それぞれのふたつ名を聞いて興味を沸いた。

「へえ、僕もそういう二つ名欲しいな」

「何を言っておる。明久よ。主にもあるじゃろ」

あれ？僕にも何か二つ名ってあったっけ？

「バカ観察処分者じゃろ。」

「それ、二つ名だけどすごく嫌な部類に入るやつだよ秀吉！それに秀吉には立派な二つ名だってあるし」

「なんじゃ？」

「せいべつふめい秀吉」

「わしは男じゃー！」

僕らがそう言い争いをしていると、霧島さんがあることを言った。

「……先生、智花にはないんですか？」

そういえば、さっき紹介した中に智花ちゃんのが無かったような……すると先生は……

「智花ちゃんには……まだないのよ」

「えっ、そうなの？ 智花ちゃん？」

「はい、私、5年生の時に転校してきたので……それで……」

智花ちゃんがそういうのであった。

それから保健室にひなたちゃんと雄二を寝かせ、霧島さんと智花ちゃんは二人に付き添うのであった。僕らが体育館に戻る途中で、昴くんがある提案をした。

「なあ、明久、木下。ちょっと相談があるんだけど、いいか？」

「ん？ 何？」

「いや、智花の二つ名についてなんだけど……考えてやりたいなって思っ……協力してくれるか？」

「それぐらいだったら、喜んで」

「うむ、わしも賛成じゃ」

こうして、僕は女バスのコーチの他に智花ちゃんの二つ名を考えるのであった。





## 第6話 再開と二つ名 後編（後書き）

智花の二つ名はやっぱ原作とは違う感じがいいですね。とりあえず今回は愛莉の話となります。ちなみに、ちよつとしたアンケートです。智花の二つ名についてはもう考えてありますが、翔子にも二つ名をつけようと思います。何か案があればメッセージか感想で送ってください。では、また次回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5239y/>

---

バカとバスケットと召喚獣

2012年1月5日18時28分発行